

## 「丹後地域における府立高校の今後の在り方」公聴会（概要）

開催日	時間	会場	参加者(保護者)
平成28年7月9日(土)	14:30～16:00	みやづ歴史の館	52名(16名)
平成28年7月24日(日)	10:00～11:30	野田川わーくばる	101名(24名)
	15:00～16:30	アミティ丹後	49名(19名)
平成28年7月31日(日)	10:30～12:00	峰山総合福祉センター	41名(16名)
	15:30～17:00	久美浜農業センター	35名(10名)
計(のべ)			278名(85名)

※保護者数については、受付時やアンケートにより把握した数

<番号(①～)：参加者、◆：府教委>

【平成28年7月9日(土) 14時30分～16時 [於：みやづ歴史の館]】

- ① 中学校3年生の娘がおり、来年の入試がどうなるか心配で来た。説明ではかなり先の話をしているが、まず来年の入試がどうなるのかが非常に心配である。資料を見ると、昨年度卒業した中学生1,086人に対し、今の中3生が901人で、△185人とかなり減るが、どのような募集定員となるのか不安に思っている。普通科ばかりクラス単位で減らされると、今の中3生は大パニックになると思う。保護者としても、普通科を減らす方向ではなく、今、丹後地域には全部で27学級あると思うので、各学級の定員を△6人ずつすれば162人減となるので、このように柔軟な募集定員にしてもらいたい。その点はどのように考えているのか。
- ◆ 基本的には9月に募集要項を出すので、現在、学校長や関係機関と調整を進めているところである。資料にあるように、200名近い生徒数の減が見込まれるので、単純に4で割り戻すと学級数も出てくると思うが、それを目安に調整を進めているところである。普通科、専門学科についても学校と調整をしているところだが、過日開催した丹後地域の高等学校合同説明会では、峰山高校産業工学科のデザイン系統については来年度募集しないとお示ししたところである。
- ② 京都府の高校の教員である。3つの分校を1つにする件だが、分校に来る生徒は、例えば、大規模校では勉強できない子など、かなり特徴を持った子どもたちが来ている部分もあると思う。そういう子たちへの配慮はどのように考えているのか。
- ◆ 多様な生徒に対応していくということで、柔軟な教育内容を考えていきたいと思っている。今、分校が果たしている役割というものを踏まえて、基本的に小さな規模で、さらに少人数に分けて指導ができるように単位制を導入することも考えており、現状の分校に通っている生徒層が新しい学校に通ってもらえる教育内容にしていきたいと考えている。
- ③ 分校の件だが、本校については3つの道として3つの案が示されているが、分校については1つの案しか示されていない。分校についても3つの案を示してもらった方がありがたい。分校の教育をおおげなりにされているような気がする。  
清明高校は、北大路と鞍馬口の間の便利なところに学校があり、どの時間からでも通えるが、弥栄分校の校地はバスが1時間に1本あるかないかというところなので、生徒が自由に通える場所にはないと思う。なぜ弥栄分校の校地に設置すると考えたのか。伊根、間人、弥栄分校それぞれが果たしている役割は違うと思う。そういう学校をなぜ統合する必要があるのか。それぞれの分校に通っている生徒はそれぞれの学校でなければ成長できないという環境で育っていると思う。弥栄分校は家政科・農園芸科が一つになって生徒を育てており、そういう形で自信を持っておられると思うので、ぜひ、1つではなく3つくらいの道を示してもらいたい。

- ④ 「学舎制」で進めることが府の提案という解釈で良いか。生徒数が減るので高校を何とかしなければいけないということで、本来であればⅡ案が良いが様々な事情があってこのような形で提案されていると推察する。生徒数が減少すると、集団活動の機会が確保できない。人間関係の固定化。学校行事や生徒会活動が活性化しない。希望進路に応じたコース設定や選択科目の開講が行えない。部活動などの課題、などが課題としてあがっているが、学舎制にすることでこれが解決するのだろうか。

私の子どもは独立しており、部外者になるのかもしれないが、学舎制の事例として京都八幡高校など3校について説明があったが、人間関係が固定化しやすいということや進路希望に応じたコース設定といったことが解決できるのか。

3校とも各キャンパスに異なる学科・コースが設置されている。ところが今回の府の提案では同じ学科が双方にある。こうなると、どのコースを選びたいかという子どもの選択によって、学舎間を移動しなければいけないケースもあるのかと思う。提案されていることが課題解決につながっているのか疑問に思う。

そこで質問だが、京都八幡高校、真庭高校、大津緑洋高校が1つになったことに不自然な印象を受けるが、なぜこの形になったのか、わかれば教えてほしい。その上で、1つにするという理念が子どもたちにとって本当に良いのかどうかを皆で考え、京都府の形を考えていく。9月に方向性を出すとのことだが、原点のところを皆で確認すべきではないか。

- ◆ 京都八幡高校については、八幡市域の生徒数が減少し、特に南八幡高校の学校規模が小さくなってきていたという状況があったため、同じ八幡市内にある2校を1つの学校とした上で、それぞれの施設を活用することとしたところである。

岡山県の真庭高校については、県において学校規模は4学級以上が望ましいという方針が出されている。落合高校と久世高校、特に久世高校の学校規模が小さくなってきたため、再編・統合を検討することとなった。当初は1つの高校にしてはどうかと話し合われたと聞いているが、設置学科が農業科であるため、例えば、落合校地に統合した場合、農場地をどう確保するのかなどの課題もあったため、せつかくある今の校地を活かそうということで、久世校地、落合校地という校地制をとられたとのことである。

山口県の大津緑洋高校についても同様に、各高校の規模が非常に小さくなっていくことが見込まれる中で、学校再編の案が示されたとのことである。当初は1校に再編しつつ、実習施設は各校地を活用するという方法をとる考えもあったとのことだが、それぞれの学校において専門的な教育を行うためには校舎を分けた方がよいといった意見もあり、1つの高校としてまとめ、合同での活動を行うとともに、それぞれの施設を有効に活用しようということで今の形になったと聞いている。

- ⑤ 真庭高校と大津緑洋高校については、学舎の特色や活用方法があったということがわかったが、京都八幡高校については（キャンパスの間が）たった2.6kmである。これがなぜ一つにならなかったのか。

- ◆ 京都八幡高校は、南キャンパスに福祉に関する学科と人間科学科を置き、北キャンパスには普通科を置いている。元々、南キャンパス（南八幡）には商業科があり、その実習施設を改造して福祉の学科と人間科学科を設置したのだが、これらを全て北キャンパスに設置するには施設的に規模が確保できないという問題があった。

また、これは全国で最先端の取組であったが、南キャンパスに八幡支援学校を併設した。福祉を学ぶ高校生と特別支援学校の子どもたちが交流を通して互いに学び合うインクルーシブ教育システムを先進的に進めてきた経過がある。一例であるが、南キャンパスで学んだ高校生が大学へ進み、その後、特別支援学校の教員となって子どもたちを指導している、など、人材を育成する場としても大きな機能を果たしている。介護分野でも人材の供給が非常に重要になっている時期であったため、そうした方面への人材供給も行っている。このように異なる学科として展開するために、双方の学校が持つ資源を有効に活用しようとしたものである。また、八幡市の子どもが減少する中、普通科を双方に置いておくと共倒れになる状況があったため、このような選択

としたところである。

- ⑥ 宮津会場なので、宮津高校と加悦谷高校の形を想定しながら質問したが、小さなエリアの中に2つの高校がある。子どもたちが何を学ぶためにそこに行きたいか。それぞれの特色やカラーを出していくことを前提に考えてもらえればと思う。普通科の充実やクラス数など受入の話もあったが、普通科というものを3年間通してどのように学んで進学させていくのか。カリキュラムや導線、教員の負担ということも考えて、形式をどうするかというよりも、「こんな学校でこのような教育をする」というようにしてもらえると嬉しい。この地域に住む人間として、この地域の最高教育機関が高校なので、そこから世界に役立つ人間として巣立って行ってほしいと思うし、あわよくば丹後に帰ってきて活躍してくれればと思っている。

このような言い方は何だが、住民のエゴを受け入れて収めるところに収めた、ということにすると、子どもたちが不幸になる。そのところをしっかりと考えて進めてほしい。

- ◆ 丹後地域における教育内容として、資料のシート42番に「加悦谷高校普通科において新たな教育内容を検討」と書いている。先ほど、京都八幡高校に関しては違う学科でと説明した。加悦谷高校においては普通科としている。

提案というか、決めていることではないが、丹後地域の場合、非常に通学距離が長くなる。中学校や保護者の皆様からは、「なるべく、普通科へはどの地域からも通えるようにしてほしい。」という要望が強いと聞いている。同じ普通科でも、小さな規模でどれもこれも同じようなものにしてしまうと特色がなくなるし、子どもたちがいろいろな進路をこれから目指していく上での幅が狭すぎる。まだまだ私どもの中でもこれからだと思っているが、例えば、医療分野や福祉分野、国際的に活躍する人材を育てるコースを宮津高校・加悦谷高校の中に配置していくことを考えてもいいのかとも思っている。こうしたことに関して皆様からご意見があればお聞きして学校の職員とともに考えていきたい。

それから、先ほどの分校に関する質問にお答えする。3つの分校にはそれぞれの学びがある。弥栄分校は農業・家政、間人分校と伊根分校は普通科。弥栄分校は全日制で3年間の学び。どの分校にも、本校の大きな規模では学びにくい、様々な困難をもった子どもたちが多く学んでいる。学力的にも、それまでの学びのつまづきがあって全日制の速いペースの勉強では厳しいという子どももいる。それが現実である。どの分校もだが、かつての機能であれば伊根分校であれば伊根町の方が進学していたが、様々な交通条件などの変化により、今はまったくゼロとはいわないが、伊根分校にほとんど伊根町の子は進学していない。間人分校も旧丹後町あるいは網野町、弥栄町、峰山町、要するに京丹後市の全体から進学してきているような状況である。弥栄分校は農園芸科・家政科を置いている。全体として、3つの分校の中で施設の・敷地的に一番広さがある。したがってここへ一定の投資をする。先ほど申しあげたような清明高校のような大きな敷地に大きな校舎を建てるということはなかなかできないが、きちんと対応できる施設を造って、そこに学びの場を設けるのが良いのではないかと考えて持っている。

ただし、弥栄分校に与謝・丹後全体から通えるかということ、かなり厳しい状況があることは承知している。少ないが、伊根町の子が伊根分校に今も1~2人行っている。その子が（弥栄分校に）通えるかということ、現実には2時間以上かかってもたどり着かないかもしれない距離がある。そうすると、与謝地域における、宮津高校・加悦谷高校の校舎、あるいは別の小・中学校の校舎をお借りするという方法もあるかもしれないが、そういう学びの場を設定することも必要があれば検討しても良いのではないかと考えている。これはまだまだ実際のニーズを踏まえていかなければ決定できないが、必要があれば検討することを含んでいる。

普通科の募集定員についてだが、これまでなぜ普通科ばかりで募集定員を落としてきたのかということ、専門学科は、専門の教員がおり、専門の施設があり、地域の産業界を支える人材を育てている。これらの専門学科はどれも1学級規模になっている。ここを落とすとなるとその学科そのものが消えてしまうので、複数の学級を持つ普通

科を落とす形で募集定員の減をはかってきた。ただそれが限界にきている。先ほどおっしゃったように、普通科を落とされたらパニックが起こるといえるのはそのとおりである。普通科に行きたいという多くの子どもたちの進路がなくなってしまう。職業学科・専門学科の再編も合わせて行わないと普通科ばかりが減っていくいびつな形になる。来年は、計算すると、160人ぐらい募集定員を落とさなければならない状況である。これをどこで落とすか。普通科中心にならざるをえないのが現状である。ただし、先ほど回答したように、一定役割を終えた系統の募集を止めたり、普通科以外の学科についても落とせるところはないかということも現在検討している。非常に厳しい状況があるので、学科全体の在り方を今後大きく見直していかなければならないところにいる。

心配されている事に、来年の春の段階で応えることは難しいが、十分意識して、来年の募集定員を決定していきたいと考えている。

- ⑦ 何点かお聞きしたいことと、質問と要望が一緒になってしまい、少しまとまりがないかもしれないが、よろしく願います。まず、この資料を見て一番違和感を覚えるところは、資料を見ても丹後地域の子どもの特徴が伝わってこないということである。例えば、厳しい話だが、偏差値や進学就職先、生徒指導件数（年間の）といったデータなどは、丹後地域の特徴として実際はどうであって、それは南部地域とどう違うのか。こうしたものは各学校の進路指導部とか教務部長に聞けばおそらくすぐに分かると思う。それが現在の高校生の姿というものである。

また、将来の高校生の姿として、現丹後地域の中高生が望む教育、望む進学先や就職先の傾向において、丹後地域にはどういう特徴があるのか。このことをどの程度把握し、どの程度検討しているのかということも聞かせてもらいたい。

- ◆ 現在の高校生の姿等については、今日の資料にはお示しできてはいないが、各学校で取り組んでいる内容、あるいは生徒の活動の様子については、懇話会の資料等でこれまでお示しをしてきたものがある。あと、就職先などについても、全体の中で丹後地域はどのような傾向のところに就職しているか。進学率がどれくらいかということについてもお示しをしており、その資料を見ていただければと思う。

また、中学生が望む進学についてだが、まずは高校に入りたいということで、中学校からは、高校に入る段階で専門学科を選ぶ生徒が少ない、高校に入ってから進路を決めるので普通科を選ぶ生徒が多いとお聞きをしているところである。

- ◆ 昨年度実施した検討会議の資料でお示ししているが、参考として申し上げますと、丹後地域の進路状況は、直近の平成27年3月の数字だが、四大・短大で51.8%、専門学校等で30.2%、公務員が2.1%、民間の就職が34.3%、その他1.6%という状況である。また、就業地域の状況であるが、丹後地域での就職が一定、4割程度が地元で就職しており、15%ほどが京都市・乙訓地域、他府県にも2割強出ているような状況である。あと中丹地域にも1割程度の方が就職されている状況である。また、26年度のデータだが、職業別には製造業に就職されている方が一番多い状況であり15%程度。宿泊とか飲食関係にも1割程度の方が就職されており、卸売・小売りに1割に満たない程度、その他という状況になっている。

- ⑧ 質問が曖昧だったかもしれないが、それが、南部地域と違ってどう丹後地域を特徴づけているのか。何が違うのか。

- ◆ 傾向としては、大学進学については、ほぼ南部地域と同じで、この地域に限って多い、少ないということではない。府全体として同じような状況である。このことについてはホームページにも掲載しているので、詳細はご覧いただければと思う。

- ⑨ 今聞けるとうれしかったのだが、ありがとうございます。

普通科を目指している子どもが多いという事実から、特色ある学校づくりが地域には必要だということとどうすりあわせていくのかという課題があると思うのだが、

目標設定、現状分析が大勢の方で幅広く公で議論されるべきだということを1点要望したい。

また、子どもたちの現状に基づいた目標設定を要望する。キャンパス化といった話が出ているが、それが本当に中高生の子たちから出てきたものなのか。彼らは何を目指しているのか。偏差値を上げたいのか。有名大学に行きたいのか。それとも地域で暮らしていきたいのだろうか。そうした声をすくい上げてもらいたい。

「京都府の教育」のパンフレットに21の取組があるが、この中で、学力充実対策や夢に答えられる府立高校づくりなどにはどの高校も頑張っているのだと思う。進学実績を上げたいとか、部活で良い成績を残したい。これはどの校長先生も望んでおられるところだと思うが、それだけではなく、もっと多様な地域と結びついた取組であったり、いじめ・非行、子どもたちの内面を大切にするような教育というものもあるのだとしたら、それを小規模校で実現できないのはなぜなのか。小規模校になると経営が苦しくなるとどの校長先生もおっしゃっていると思うが、それはおそらく、教員の定数が減らされたり、予算配置が減るといった法律的な問題などがあるからだと思うのだが、小規模校になると子どもの数が少なくなって教育が厳しい、という点だけではなく、市民や私にも分かりやすく説明してもらえると納得がいくかと思う。小規模校になる、生徒数が減少するというところで4つの課題を挙げてあるが、「人間関係が固定化しやすい」、それは悪いことか。私は大規模校だったが、高校の時の友人はほんの数人しかいない。「学校行事や生徒会活動等の活力が乏しくなり、行事の精選が必要となる」、大規模校で本当に生徒会活動が活発に行われているのか。それも検討が必要だと思う。「希望進路に応じたコース設定や選択科目の開講が行えない」、大規模校では本当にみんなが納得したコース選択を行っているのか。「部活動の部員数確保が困難」、本当に部活を頑張りたくて学校を選んできているのか。そうした検証が、生徒数が減ったら、という一般化されたことしか述べられておらず、現実に即していない印象を受けるので、その点の分析をしっかりとしてほしい。教育現場でも、企業的な分析手法を取り入れようという波が来ていると思うが、ぜひ実践してもらいたい。

予算から考えた大枠からの落とし込みではなく、子どもたちから出てきた納得のいく形を考えてほしい。さんざん要望だけ述べて、解決案を示さないのもどうかと思うが、例えば、この地域で上位層の子たちがもっと市内の方に行きたいというのならそういう条件整備をしていく方法もあるのではないか。学区解放などの大きな話になってくるかもしれないが、子どもたちのニーズから考えればもっといろいろな議論をされても良いと思う。

最後に1点だけ。3つの案を示してもらっているが、それぞれの場合の保護者コストを示してほしい。通学などの保護者の方にかかる負担をある一定の形で示してもらえたら考えやすいと思う。

- ◆ いろいろと疑問をお持ちなので、できるだけお答えできたらと思い、マイクを取らせてもらったが、難しいこともある。

分校を置いておくと予算が必要なので非効率ではないかといったことは全く考えていない。ただ、課題として1つ例を挙げると、例えば、音楽の専門の先生を分校に置いたとして、学級が学年1学級ずつで3学級か4学級しかない中で、音楽の教員は1週間に何コマの授業をするかということ非常に少ない。それならその教科は仕方ないので非常勤講師にしようかということになる。京都府が多くの予算を投資して、本務者で音楽の教員を置きます。美術も置きます。書道も置きます、とした場合、府民の税金の無駄ということではなく、その教員は1週間に何時間授業をするのかということに直面してしまう。したがって、非常勤講師をお願いする訳である。ただ、非常勤講師となると、正規の教員に比べて経験豊かな方もいらっしゃるが、経験があまりない方もいらっしゃる。また、この与謝・丹後地域で優秀な力を持った方を非常勤講師で探すことの困難さもある。例えば学舎にすれば、こちらの学舎に持ち時間がこれだけあり、他方に持ち時間がこれだけある。そうすると非常勤講師ではなく、正規の教員を置いて、両方で月曜日と火曜日はこちら、水曜日・木曜日はこちらというように曜日を分けて勤務してもらえば、専門性の高い教育を施すことができる。音楽を例に挙げたが、その他に、理科には物・化・生・地4科目があり、社会にも日本史や世界

史、公民などがある。それぞれ専門性の高い正規の教員を配置して両学舎で教えてもらうのが望ましいということが、学舎制の1つのメリットであり、これは部活動の指導者においても同じことが言える。学校の教務担当でないとなかなか読み取れないと思うが、そういうことを言いたいがために19番の資料をお示ししている。

それから、子どもたちの思いを聞いて、ということだが、まったくそのとおりである。これまで何度かの懇話会などを行ってきて、中学校の先生などからもご意見をお聞きした。普通科に行きたいという子が最初が多い。京都府は普通科率が高く、他県にはもっと普通科の少ない県が多くある。また、京都府は大学進学率が非常に高い。全国でトップか、2番目である。したがって、普通科を多く設置するということは、京都の子どもたちのニーズに合っているということは自覚している。ただ、普通科だけでは子どもたちの未来を大きく広げていくには幅が狭すぎると思っている。栗田半島には海洋高校があり、全国に冠たる水産系の学校として特色ある教育を行っている。また、宮津高校に建築科があり、峰山高校には工業系の学科がある。この工業系の学科は、地元産業からの期待が非常に高い学科である。久美浜高校は総合学科だが、農業教育や福祉教育を行っており、福祉分野の人材を地元へ供給している。子どもたちの思いと産業界の思い、日本の未来、丹後の未来ということを含めていかなければならない。これは大変難しい課題であり、本日の時点でそうした点を全て明らかにできていないのは、まさに難しいからであり、今日の皆さまのご意見を含め、今後、丹後・与謝地域であと4箇所で開催を行うので、ご意見お聞きし、また、各高校の先生方のご専門の立場からもご意見や産業界のご意見も聞いて、1、2年かけて議論していこうと考えている。全部お答えできていないが、そのようなプランを持っているので、よろしくお願ひしたい。

- ⑩ 意見というか、コメントなのだが、学舎制の例として、京都八幡高校と岡山県と山口県の事例を挙げてもらっているが、それぞれのキャンパスで学科がかぶっているところはない。キャンパスごとに学科が分かれているということで、そういう理由も立つのかと思ったのだが、この地区の例で見ると、加悦谷高校も宮津高校も両方に普通科があるという形になっている。先ほどの方も言われたが、本当に残すのが良いのかどうか。本当に子どもたちにとって一番良いのは何かということを考えてもらいたい。おそらくこの3つの道のうち、1番はないだろうということは理解するのだが、統合するのか、学舎にするのか、どちらが本当に子どものために効果があるのかということで決めるべきであって、その地区に高校がなくなるのが嫌だと地区の人が言っているから、ということで子どもの望みを減じるようなことが起こってほしくない。そのためには、「普通科であれば統合する方が良い。その方が効果があるのだ。」ということであれば、「子どものためにやる。」と胸を張って言ってもらえば良い。同様に、「分校についてはこういう形が子どもたちにとって望ましい。だからこうする。」と行ってもらえば良い。「本当はこうしたいのだが、地区が納得しないからキャンパス制にしました。」というような結論になってほしくない。

私が子どもだった頃は、もうずいぶん昔の話だが、宮津高校に網野町や久美浜町から通っている子もいた。今の宮津市の子でも、西舞鶴高校や福知山・舞鶴の私立高校に通っている子もいる。教育のプロの皆さんが、「これでやるのが一番子どもたちのためになる。」という形にしてもらいたい。先ほどの方ではないが、地域のエゴで子どもの教育を歪めるようなことがあってはならないと思っているので、そういう意見もあったということをお知らせしたいと思います。

- ◆ ご質問ではないので答えとしてではなく、私どものつぶやきとして聞いていただきたいのだが、まず宮津高校と加悦谷高校の名前が挙がっているので、逆だったらどうかと考えてもらいたい。例えば、宮津高校を残して加悦谷高校がなくなる。あるいはその逆で、宮津高校がなくなって加悦谷高校に統合するといった時に、宮津地域の皆さんはどうお考えになるか。地域のエゴという捉え方をすればそうかもしれないが、高校は長い歴史を持っている。小・中学校の統合時に、散々、市町教育委員会で議論され、説明し、苦勞されていることは知っているが、郷愁や自分の育った学校に対する思い、町のシンボルといったことへの思いが数多く出てくる。ところが、ではそこ

で学ぶ子どもにとってそれが良いのかと言うと、やはり小さな規模で複式学級になってしまうといったことになると、とてもではないが、お父さんやお母さんは、「それは昔の方々の思いであって、私たちの子どもにはそんな思いはさせたくない。」という思いが出てくる。小・中学校の場合、特に小学校の場合にはそうしたことが出てくると聞いている。高校の場合はどうかというと、高校がいくら小規模化するといっても、宮津高校で4、5学級、加悦谷高校で2学級ぐらいの規模ではまだしばらく続けられる。両方の学校が持っている様々な教育資源を最大限に引き出すようなスタイルは、必ずしも統合してしまうことではないだろうと思う。何万平米という敷地、建物の面積を有効に使う。両方普通科だとどうなるのか、ということをおっしゃった。そのとおりである。したがって、普通科でも少し味の違うコースを置いて違うことが学べるベース。例えば、先ほど福祉や医療、グローバルのことを言ったが、これは例なのでそうするというのではないが、例えば、加悦谷高校でそうした教育を行うとしたら、宮津高校とは違う学習ができるということで選択の幅が広がる。ただ、それぞれが規模が小さいがゆえのデメリットが数多く出てくるので、そういう良い面を活かしつつ、デメリットを拭き去るための方策としての学舎制にしてはどうかということをご提案申し上げている。

まだまだこれに対しては、疑問や別のご意見もあると思うが、そういう考え方を持っていて進めているので、ご意見をいろいろとお寄せいただきたい。今後、パブリックコメントとして書面などでもご意見伺うことにしているので、それもよろしくお願ひしたいと思う。

⑪ いろいろな人の意見を聞きたいのでと最初に説明があったが、今日、この地域のすべての保護者が来ているわけではないが、どのように意見を聞こうと考えているのか。中学校の保護者あてにアンケートを取るといったことを計画しているのか。また、聞いてもらえたらと思うのだがどうか。

◆ 小・中学校の保護者の方にご案内させていただき、公聴会の場所を5箇所設定させていただいている。また、本日もアンケート用紙を入れさせていただいているが、そういう形でご意見をお伺いしたいと思っている。今のご意見については、ご要望ということでお聞きする。

- ① 中3生に対する公立高校の受入率が募集定員の79.4%とは、中3生の5分の1を受け入れないことを前提にしている。丹後地域の私学は宮津市に1校しかないにも関わらず、例えば平成33年度では、卒業生数は783名、募集定員推計が622名なので、私学に160名分を保障することになる。私学がなくなれば良いと言うつもりはないが、その160名は公立高校のサービスを楽しむことから排除される。79.4%というそもその出発点が、少子化の中では無理な想定ではないのか。

小規模化の課題ばかり取り上げられているが、小規模化のメリットや各高校の存在が地域においてどのような現状にあって、どのような有効性と課題があるのかという現状分析が示されていない。デメリットだけが指摘され、だから統合していかなければならないという論理構成になっている。現状の把握の仕方・次の構想の立て方として不備がある。現在の高校の配置の有効性と各校が地域の中で果たしてきた役割、今後必要であるということ、小規模の有効性も検討し、その経過を示すべきである。その上でなおこうすべきだと提起するのが筋ではないか。

- ② 加悦谷高校の環境に配慮した検討をしてもらっていると受け止めている。人口の多い大都会と違い、丹後地域における高校の有り様は地域の現状を踏まえて検討してもらわないといけない。与謝野町は非常に知的水準が高い。依頼を受けて、加悦谷高校で3年ほど教壇に立ったが、宮津高校よりも加悦谷高校の方がずっと上で、大変誇らしく思ったものである。この地域は、京都市内と異なり、塾もなく、将来設計を行う上で、大きなビハインドがある。小規模校でも重点的に残し、教育力を倍増してもらうことが教育委員会のあるべき姿である。おらが高校を支えたいと思い、地域ぐるみで頑張っているのが加悦谷高校である。

丹後地域では、宮津市と与謝野町が一番人口密度が高く、分校を置かざるを得ない地域とは違うということに配慮して検討し、結論を出してもらいたい。

- ◆ 募集定員の設定が低いのではないかとということだが、宮津市にある京都暁星高校に進学する生徒以外にも、中丹地域や他府県の高校等に進学する生徒がいる。全日制進学率93%を目標としながら、私学や他地域への進学状況も踏まえて79.4%としているが、他の通学圏に比べて高い数値である。

この地域では加悦谷高校が唯一の高校であり、高齢者の方におせちを届けたり、学校に来ていただいて交流するなど、地域に根ざした取組を行っている。生徒数の推計を踏まえると5～6学級規模の学校が2校あれば対応可と想定をしている訳だが、地域とつながる学校ということ踏まえ、学舎制により小規模でも学校を地域に残して、他の学舎との連携により、教育内容を充実していきたいと考えている。小規模単独校で残る課題を補いつつ、連携の在り方を検討しているところである。

- ③ 宮津高校は「普通科・建築科の教育内容の充実」、加悦谷高校は「普通科において新たな教育内容を検討」とある。なぜ加悦谷高校においては「普通科の教育内容の充実」ではなく、「新たな教育内容を検討」なのか。加悦谷高校は今までの普通科ではなく、違う内容を検討しているということか。なぜ高校によって異なることを考えているのか、もう少し詳しく聞きたい。

「多様な学びの場を保障する」とあるが、地元の高校、地元の普通科に行って普通の大学に行きたいという多くの子どもたちの望みに一番に答えてもらいたい。今までどおりの高校を残してほしい。小規模校だと教育レベルが下がるということが教育委員会の見解なのか。多様な取組をしても避けようがないと考えているのか。

- ◆ 普通科については、一定、丹後通学圏の中で選択できる制度としており、この地域からも宮津高校に進学している。宮津高校には地元の生徒も与謝野町の生徒も進学している傾向にあるが、加悦谷高校に他の地域から進学する生徒は少ない。加悦谷高校においては、現状も踏まえながら、普通科の教育内容の魅力化・特色化を進めていくということまでこうした表現としている。



小規模になると、授業や部活動、その他課外活動において困難が生じること、また、多様な講座展開や教員による指導面においても様々な課題が生じることが想定される。今年度、加悦谷高校においては、1年生が野球部に1人も入部しなかったと聞いている。子どもたちが学び合いながら育っていく環境が必要であると考えている。課題ばかりではないが、一定の規模を保ちつつ、教育力の向上を図っていくという観点から検討を行っているところである。

- ④ 再度聞くが、加悦谷高校普通科は今までとは違う普通科にして、宮津高校は今までどおりということか。加悦谷高校の普通科は、学舎制にするから変えるのか、そうでなくても変えるのか。どう変えようとしているのか具体的に聞きたい。

また、小規模校については、どんな手を使っても教育レベルが下がることは避けられないと教育委員会は考えているのか。

- ◆ 加悦谷高校には、以前にはⅠ類・Ⅱ類の他、Ⅲ類の体育系を設置していた。類・類型制度は解消したが、この間に蓄積してきたことを最大限活かしていかなくてはならないし、宮津高校についても同様である。この間、子どもたちが多様な学びを選択できる教育制度を築いてきた。地域の資源や学校が蓄積してきたものを活かした新しい教育を追求していくことが良いと考える。

地元の普通科へのニーズを踏まえると、普通科において新しい教育内容を検討することが適当だと現段階では考えている。具体的な内容については、与謝野町の教育大綱では国際的な教育を進めるとされており、加悦谷高校と連携して進めていきたいというご意見もお聞きしている。それならばグローバル化に対応した教育を進めるのも1つであり、また、高齢化の進む社会において介護・福祉を学ぶコースも考えられる。看護師など医療分野に進むことを希望する生徒も多いことから、そうした内容を学ぶコースも考えられる。普通科なので、資格に直結する内容ではなく、各分野の基本的な考え方や姿勢、スタンスを学ぶことになるが、そうしたことを検討しても良いのではないかと考えている。

伊根分校などには大きな集団では学びにくい子どもたちが進学している。木造校舎で落ち着いた良い学校である。何らかの支援が必要な子どもたちにとっては小さな学びの場の方が通いやすいということがある。今回、分校の統合を案として示しているが、伊根分校には伊根町の子は2人しかおらず、他地域からわざわざ通っている現状がある。それなら、新しいものをつくってはどうかという考えを持っている。小さな学びの場や多様な学びの場は確保したい。弥栄分校で足りなければ、他の本校に教室をつくるといったことも考えられる。

大学進学等に向けては、小規模校は教員集団が小さくなる。少数でも優秀な先生がいれば良い、という意見もあるが、例えば、理科には4科目あっても4人の教員を置けず講座展開ができない。この地域で優秀な非常勤講師を探すことも難しい。

また、子どもたちの切磋琢磨は必要である。小さな集団で学ぶメリットはあるが、一定規模の中で励まし合い、競い合いながら学ぶことが教育の場には必要である。

どんなことをしても小規模化によるレベル低下が食い止められないかといえば、様々な資源を大量に投入すれば不可能ではないかもしれない。ただし、大量の資源を投入するとなると、大量の財源が必要となる。財政論を言うつもりはないがどれだけの効果が期待できるかということになると非常に難しい。小規模校のメリットはあるがデメリットが大きい。

危機的状況がこの地域に迫る中、どう乗り越えていくかを真剣に考えていかなければ、全校がじり貧になってしまうのではと恐れている。地域の学び舎を残しつつ、小規模校のデメリットをどう解消するかを考えて学舎制を選択肢とした。純粋に教育論で言えば統合する道もあるが、また違うデメリットを招くと考えている。

- ⑤ 現状では、加悦谷地域の子どもは（加悦谷高校を選択せずに）わざわざ宮津高校に行かなければならない。あるいは、福知山や他府県の高校に行かなければならない。極端に言えば、加悦谷高校と宮津高校には教育格差があったということだが、それを元に戻す方法はないのか。

◆ それぞれの高校で特色化を追求してきたところである。学舎制については、1 + 1は2ではなく3になるようにと先ほど説明した。単に数合わせをするのではなく、新しい教育を創造し、地域の活性化と地域の人材育成、そして一人一人の子どもを最大限に延ばす教育をこの機会に追求したいと考えている。

⑥ 今までにしてきたことはどうなのかと聞いている。こういう状況になったのはなぜかということである。

◆ 8割程度の子が全日制高校に進学している。元々、兵庫県や中丹地域の私学も選択肢に入っていた。かつての完全小学区制から、昭和60年度に通学圏を設定し、他の普通科も選択できる新しい制度としたことにより、子どもたちは公立高校についてもいくつかの学校の中から選択できるようになった。その結果、それぞれの学校において、様々な教育を展開することが進められてきたわけで、このことは積極的に評価すべきものだと考えている。今後の少子化に対応して、危機的な状況を克服する手立てとしてどのような在り方としていくのかを模索しているところである。

⑦ 府立高校の社会科の元教員であるが、5～6クラス規模の学校でも、地歴も公民も同じ教員が担当していた。ほとんどの学校でそうなのではないか。小規模校のデメリットとしてあげるのはいかがでしょうかと思う。

公立高校が20数校ある通学圏と丹後通学圏が全く同じ条件・基準で良いのかと思う。今回の話はおそらく何年か先の話だと思うが、すでに来年度の府立高校の募集が160人減らされるという話を聞いている。そういう意味では、今の中3生にも影響する。現状のまま減らすと丹後通学圏の教育条件が相当悪化すると思うので、都市部と同じ基準で教育条件を考えるのは限界があるのではないか。

また、最近では普通科といっても随分内容が変わってきた。普通科の中でいろいろなことをしているが、私は少し違うのではないかと考えている。専門学科を選択する子は、明確にこういうことをしたいと思って選択するが、普通科を選択する子は、まずいろいろな科目をまんべんなく勉強しながら、その中で自分の進路を考えていく。丹後地域に普通科を希望する子が多いということは、高校3年間の中で自分の進路を考えるということである。専門学科とあまり変わらない普通科もあるが、普通科の中に特別なカラーを出すと、その内容を希望しない生徒はその学校の普通科に行けないということになる。その地域の子どもたちが地元の高校の普通科に行って、3年間しっかり学びながら将来の進路を考えるということだと思うので、学校数や学科、普通科の在り方の問題を切り離して考えるのはおかしいのではないか。

キャンパス制について、キャンパス自体馴染みがないが、示されている内容が非現実的なのでイメージがわからないのではないか。連携・交流は確かに大事だが、高校間とキャンパス間では連携・交流の意味が異なる。10数kmも離れていて本当に日常的に可能なのか。京都八幡高校の知り合いに聞くと、「やはり本校と分校である。大きい方が本校、小さい方が分校になる。」とのことだった。キャンパスという名前に惑わされてはいけない。他府県の例を見ても、キャンパス化が統廃合につながっていくのではないのか。先ほども統廃合をにおわせながら話をされていた。通学のことも考えると、丹後地域にあった基準、教育条件で府立高校を置くべきだし、広い地域から府立高校がなくなると教育条件が悪化する。わざわざ不自由なキャンパスにせず、本校としてしっかりと残し、それぞれの教育条件を充実させていくことが本来の府立高校の在り方・役割として求められるのではないか。

⑧ 保護者の実感としては、高校の特色化はできる子だけの話であり、実際には選べない。中丹地域の私立高校に通っている生徒が相当数いるということだが、望まず行っている子も私の周りにはかなりいる。来年度160人募集が減るようだが、中3生の保護者としては、子どもが地域の高校に行けない可能性が高いのではと大変深刻に受け止めている。どういう形で減らされるのか。1クラスずつという減らし方が妥当なのだと思うが、普通科を各学校で減らすことになると心配である。

キャンパス化は保護者からすると魅力がない。子どもを通わせている側からすると、

各学校それぞれで頑張ってもらっていると思っている。加悦谷高校でも大学進学を目指している子には相応の対応をしてもらっている。子どもが減るから専門の教員がなくなるということだが、それは採用や配置の仕方の問題ではないのか。キャンパス化で行き来ができるということだが、20km離れた宮津高校と加悦谷高校でどういう交流を行うのか。入学式、卒業式を一緒にする場合、加悦谷高校の子は宮津高校に行かなければならないのか。自分たちが学んだ校舎で栄えある卒業式が迎えられないのならそれはメリットではない。ICTを活用した授業もデメリット以外の何物でもない。

今日の公聴会についても、学校からちらし1枚配られただけで、呼びかけがあったわけではない。「こういう会議があるから行こう。」と声をかけても、「校長先生や教頭先生、地域の偉い人が来る会議で発言はできない。」という方や、仕事で来られなかった方もたくさんいる。8月中に決めるということだが、この会議をもって地域や保護者の意見を聞いたとされることには非常に憤慨する思いがある。

- ⑨ 通学の利便性についてだが、私の高校時代には加悦谷高校はなく宮津高校に通っていた。当時は加悦鉄道で丹後山田まで行って通っていたが、加悦谷高校を残してもらえるのなら、加悦の生徒は自転車で通えるし、岩滝からも加悦谷高校に来てもらえば良い。加悦谷高校は丹後地域で最も利便性の良い場所にある。

- ◆ 来年度の募集について、中3生の数が減っても募集定員を下げなければ良いという意見もあるが、子どもが減る中で募集定員を下げなければ全員入学となり、選抜の意味がなくなる。厳しいようだが入学者選抜に向けて子どもたちを勉強させて、迎え入れており、これが働かなくなると学力的な到達段階が高くならないためそれは避けなければならない。与謝・丹後でバランスよく定員を減らしていく方法をとりたいと考えている。学級は40人単位だが一部の小さい学校では30人単位の学級としている。40人単位で考えると受入率が大きく変動する場合には10人単位で考えないとうまくいかない。例年どおり、8月末か9月初めに明らかにしたい。

今年加悦谷高校の野球部は新入部員がおらず存続の危機にある。宮津高校と1つの部にする事で毎日同じ場所で練習することはできなくても、バスなどを確保して試合前には合同練習するという事も可能である。これは1つの例だが、そういうことができるようにしていきたい。

学習においても、ICTを使えば同じ先生の授業を同時に受けられる。また、塾のない地域では学校の補習が非常に重要になってくる。それを両学舎間で共通で行うこともできる。

教員の専門性は高いに越したことはない。教科だけでなく教科の中の科目においても専門性の高い教員、地域のベストの教員が指導することで一番力がつく。そうしたことが両学舎間でできることもメリットである。

まだまだ疑問点もあると思うがより具体的なご意見をぜひお聞きしたい。

- ⑩ 本校について、三つの道の方針についてはありがたく思っている。今まで様々な意見を聞かせてもらったが、今後子どもを高校に行かせる保護者にもいろいろな考え方がある。数値だけでキャンパス化になるのは仕方がないのかもしれないが、将来のことを考えて、どのような思いで進学するかについてはいろいろな思いがある。部活動がしたいという子や進学を目指す子ども。高校生活をエンジョイしたい。交通の便もある。単独校・キャンパス化のいずれにしても、魅力ある学校でないと生徒は入ってこない。現中3生の保護者からすると、どこの学校に行けば良いのか、各学校の特徴やキャンパス化の特徴を提示しないと迷ってしまう。その点も踏まえて考えてもらいたい。

部活動については、キャンパス化すると大変になるのではないかと。教員や生徒の移動により内容が薄くなってしまわないか。特化した教員が指導している部もあるが、充て職で教員が担当している場合もあり、練習しているにも関わらず強くなっていない部もある。外部から指導者を呼ぶことも検討すべきではないか。

地元から進学を希望している生徒がいる。進学に向けて、また、部活動がしたい、野球がしたい、テニスがしたいという方もいると思うので、学舎制にせよ単独校にせ

よ、生徒たちが行きたいと思う学校にしてもらいたい。

- ⑪ 加悦谷高校について、コースを新しく設置し、選択できるようにするということが、専門学科にしないという点で言えば、普通科の勉強をしたいという子どもたちを受け入れるコースを明確にすればするほど、通学範囲が広がったり、行きたい学科がなければ遠くの学校に行かなければならないということが増えてくるので、そういう考えを示してもらっているのだと思う。丹後地域を1つと考えると、各家庭の通学費の負担が大きくなっていく。それに関してどう考えているのか。

介護にしても、単位数の少ない教科は専門の教員が確保しにくいという中で、専門の教育をコースでどれだけのことをしてもらえるのか。おそらくそのコースには手厚い手立てが行われるとは思いますが。

丹後地域は厳しい状況にあるので、学級の数も40人ではなく、専門学科と同様に、普通科でも少人数の基準を設けて手厚い教育ができるように考えてもらいたい。

- ⑫ シート17で「学校の小規模化により想定される主な課題」をいくつか挙げられている。弥栄分校には現在全校生徒が74名しかいないが、ここに上げられている課題についてはすべて否定をしたい。「集団活動の機会が確保できず、人間関係が固定化しやすい」とあるが、74名と確かに少ないが集団活動もしている。人間関係が固定化することは確かにあるが、固定化して何がいけないのか。中学校時代にはできていなかった生徒が、高校で人間関係をつくって成長できていると自負している。

行事の精選については非常に厳しいが、弥栄分校では行事をたくさん行っている。学校行事や生徒会活動をとっても活発に行っている。農業クラブや家庭クラブがあり、学校行事を数多く行っている。新聞等でもかなり報道してもらっており、みなさんもご存じだと思う。学校行事の活力が乏しくなるということは全くない。

中学校の時にはなかなか表に出なかった子たちを一から育てあげて生徒会会長にもするし、家庭クラブや農業クラブの会長にし、外に出て行くことによって人間の成長を勝ち取っていく。そういう教育ができるのは少人数ならではだと思っている。少人数がデメリットだとは思っていない。逆にチャンスだと思っている。生徒が減るということは手厚い教育ができるチャンスだと思うので、丹後地域の学校がすべて弥栄分校のような学校になれば良いと思っている。チャンスだと捉えて手厚い教育をするという方向で考えてもらいたい。

希望進路に応じたコース設定や選択科目の開講ができない可能性があるという点については確かにそうだと思う。部活動については、弥栄分校は74人しかいないので確かに野球部はない。サッカー部もない。団体競技はできないが、軽音楽部やバスケットボール部、バドミントン部、卓球部などで、放課後に嬉々として部活動にいそしんでいる姿を見ていると、なぜ野球部がなければダメなのかと思う。加悦谷高校の野球部には新入部員が入らなかったとのことだが、生徒数が多くなれば入るのか。野球部でなければならぬのか。少人数でも部活動が全くできないということはないし、できる範囲でやればみんな成長が勝ち取れると思っている。

教職員の減少についても、文科省はお金を出さないかもしれないが、府教委が予算をつけて教職員をしっかりと確保してもらえば、教育の質は十分保障できる。

- ◆ 現在でも高校を選択できる制度のもとで、幅広い地域から通学している。生徒の学舎間の移動については、スクールバスの確保に向けて今後検討していきたい。

専門学科であれば、将来の進路を見据えて学校選択をしなければならない。普通科に入学した上で、そこでの学びを通じて、またコースを選択することで、専門学科の専門教科25単位というしほりを緩めた上で、将来の大学進学、就職に向けて、子どもたちが高校で専門性を高めていけるという観点も含めて、学校での学びを充実させたいと考えている。

- ① フレックス学園構想のもと、昼間定時制で3年または4年での卒業を可能とする単位制にするとのことだが、現在の弥栄分校の農園芸科や家政科についてどう考えているのか。

また、キャンパス制の場合、1校は普通科だけにしてもう一方には専門学科を置くのか。それとも双方に普通科を置きつつ、専門学科も置くのか。例えば網野高校と久美浜高校では学校間の距離がある。合同での授業や行事、部活動が本当に可能なのか。冬場の移動が非常に心配だが、そうした点はどのように考えているのか。

- ◆ フレックス学園構想に基づき、京都市内の清明高校で昨年度から様々な学びを実践している。柔軟なシステムや教育内容として、どのような学びにするのかということについては今後検討していく。現在弥栄分校に設置している農業と家政の学びを活かした教育内容にするかどうかについても今後検討を進めていきたい。

学舎制にした場合の教育内容については、学校の先生方とも十分に議論しながら、検討していきたい。普通科のニーズが一定あることも承知している。網野高校には専門学科を設置しているが、そうした今ある教育内容をどう活かすかという視点も踏まえながら、検討していきたい。

また、キャンパス間の移動については、今後、スクールバスの導入も含め検討していきたい。

- ② 学舎制になり息子が通うとして、本来の授業は網野高校だが、部活動は久美浜高校で合同練習をする場合、どうやって家に帰るのか。例えば、網野高校に通う場合は電車で通うかもしれないし、車で送迎しているかもしれない。でも部活動で久美浜高校に行った場合、久美浜からの定期を買わなければいけないのか。久美浜に迎えに行かなければいけないのか。

- ◆ 網野高校に通っている生徒でも久美浜地域から通っている場合には、久美浜での活動が終わったらそのまま帰宅するケースもあるし、学舎間でスクールバスを導入した場合には、最寄り駅まで生徒を送り、そこから帰宅するケースもあると考えている。学舎間の移動手段と共に、帰宅時の交通手段も検討したいと考えている。

- ③ 費用は保護者が負担をするのか。

- ◆ スクールバスの運行については公費で負担することになる。様々な地域から生徒は通っているので、そうした状況も踏まえて運行経路については検討したい。

- ④ 3パターン提示しているが、学舎制の説明が一番長く、「こちらに誘導されるのだな」というのが客観的な感想である。どうしてもある程度の選択は奪われ、今のままでは無理だから、ある程度の目新しい刺激を与えてあげるから学舎制に移行するというように聞こえる。「そういうこともありなのか。」と思って聞いていた。

学舎制にするのであれば従うしかないが、この地域にはスポーツ科がない。再編するにしても、今ある学科を存続させるのが関の山で、この際、新しい可能性を与えてあげようとはされていない。昔は加悦谷高校にコースがあった。今もあるのかよくわかっていないが、スポーツをしたい子は私学に行けという専門学科や部活動の形態になっている。学科的には十分かもしれないが、スポーツ科は今の子どもの夢だと思う。そうした内容を奪った形のまま、校舎の配置だけを考えるとという中味のなさを感じる。その点について何か考えていることはないのか。

また、学舎制にする場合、あと何年程度で実施するのか。ここまで絵が描けているということは決まっているのではないのか。体裁だけのために話さないような気がしており、いかがなものかと思う。

- ◆ 5年後、10年後を見据えると、5～6学級規模の学校が2校あれば対応可能であると推計をしている。ただし、それぞれの高校が担ってきた役割、また、地域とのつながりや高校に寄せる思いがあるので、そうした中では統合するわけにはいかないだろうということで、それぞれの校舎を残した形での学校の在り方として学舎制の導入を検討したいと考えているところである。

教育内容については、1+1が2ではなく3となるような在り方が考えられないかということも含めて構想を描いている。例えば、網野高校の普通科や企画経営科、久美浜高校の総合学科での学びを踏まえつつ、一例であるが、観光や食に関する学びの充実も考えている。スポーツも1つの検討要素だと考える。スポーツ＝部活動ということではないと思うが、子どもが充実した学校生活を送る上ではそうした活動も必要になる。現在の学校規模で本当に良いのかということで検討している。

実施時期については、例えば、現在受検を控えている今年の中3生は平成31年度に高校3年生になる。その際に、学校の在り方が変わるということは避けたいと思っているので、最短でも平成32年度になるのかと思う。

- ⑤ 何年度か。32年度か。もう一度答えてほしい。

- ◆ 最短でも平成32年度になると考えている。

- ⑥ 平成32年度目処にした場合、31年度に入学した子はどうなるのか。大きく変われば同じ扱いを受けられない。

- ◆ 現在、公聴会を開催して意見をお聞きしており、今年の9月頃に一定の方向性を示し、その上で、今後、教育内容などについて具体的な内容を詰めていく。現在の中2生には学校の形がどう変化するのかということを示した上で、次年度の受検に向かってもらいたいと考えている。そういう意味では中3生と中2生では、示す情報や内容が異なるということについてはご理解いただきたい。

- ⑦ 丹後地域は広域である。例えば、伊根町から弥栄分校に通う場合に、保護者が負担をしなければならない通学費の試算はしているのか。また、日程であるが、京丹後市が小学校の統廃合を行った際には、保護者や地域に丁寧に対応してもらった経過がある。日程的に早急すぎるのではないかと疑問であるがどうか。

- ◆ そもそも現在の状況でも地元の中学生在が地元の高校に通っているだけではなく、一定広範囲で通学しており、その状態に変化はないと思っているが、通学費については今後の検討要素の1つかとは思っている。

日程の関係だが、公聴会を5回で開催し、その状況も踏まえて在り方懇話会も開催して出席者の方からもご意見を賜り、最終、計画案を作成した上で、地域、保護者の方のご意見を伺いたいと考えている。示した案ですぐに決定することではなく、そうしたプロセスも踏まえながら進めていきたい。

- ⑧ 全体に関わることだが、高校の1クラスの人数は現在40名であるが、丹後地域スペシャルということではないが、高校までの距離が非常に長いという丹後地域の特性を踏まえて、例えば、40名を35名にするなど、1クラスの人数を減らしてほしい。そうしたとしても人数の減少には焼け石に水かもしれないが、まずは、この地域の子どもを大事にしてほしい。京丹後市だけではないが、人口がかなり減ってきている。小学校の統廃合がそれに拍車をかけている。高校の改編で教職員の数が絶対的に減っていくことになれば、さらに人口減につながるのは明らかである。教員の確保を含め、個々の生徒の手厚い教育を進めていく上でも、クラスの定員を減らしてもらえないか。地域のエゴだと言われるかもしれないが、そうしたことも十分に検討した上で改編をしてほしいと思うが、そういう考えはないのか。

◆ あくまでも教職員の配置は40名がベースであり、財政議論も十分踏まえていない段階で、40名より減らして対応すると約束はできない。専門学科などでは募集定員を30名としている事例もあるので、そうしたことも視野に入れながら、今後、考えていきたい。募集定員の設定時に10名刻みで設定したこともあるが、それはあくまでも過渡期のことであり、抜本的にそうするかどうかについては検討する必要があると考えている。

⑨ この件は強く要望したい。クラスの定員を減らしてほしい。

弥栄分校に勤務して4年目になる。清明高校型のフレックスとして、伊根分校、弥栄分校、間人分校を1つにして、弥栄分校の土地を利用することが提案されているが、現在の弥栄分校が行っている教育の実績や教育力を教育委員会はどのように評価しているのか。

弥栄分校では、今年40名の定員に対して、定員は割れているが35名という例年になく多くの生徒が入学した。先日1学期の終業式を終えたが、全員出席であった。35名の中には、いわゆる長期欠席や不登校の経験のある生徒が10名以上いる。そういう子どもたちが1学期間学校に通い、それ以外の課題もたくさんある中で、しっかり学習ができています。ある教科において不認定の出ている子もいるが、少なくとも全員終業式に出席して顔を見せてくれたことを大変嬉しく思っている。彼らはなぜ中学校の時にはできなかったのか。なぜ弥栄分校には通えているのか。先日、中学校の先生が見学に来られて、「驚いた。あの子がこんなふうに授業を受けている。本当に奇蹟のようだ。」という声も聞かせてもらったが、この背景にある学校の教育力の源泉はどこにあるのか。農園芸科と家政科の専門学科の教育内容が彼らにとっては非常に大きな魅力になっている。そうした教育を目指してこなかった生徒たちも生き生きと取り組んでいる。

3年間、クラスの中でしっかりと様々な行事を行い、地域や他の学校ともつながっている。アクティブラーニングやインターンシップ、キャリア教育などの実践が、生徒たちを生き生きとさせている。そういう実績をもって取り組んできた。こうして積み上げてきた実践をしっかりと継続できる形のものにしてほしい。フレックスによってそのことがなくなるようなことになれば、今ある教育財産も吹っ飛んでしまう。必ず維持できるような形の議論にしてほしいと強く要望する。

◆ 弥栄分校は全日制の分校として取り組んでいるが、特にこの間、多様な生徒が入学してきている中で、丁寧な実践を積み重ねてもらっていると感謝しているし、そのように評価している。特に平成27年度からは、柔軟な教育システム実践研究事業に取り組み、学習ニーズの多様化に対応した支援体制の在り方、基礎学力をしっかりと子どもたちに身につけさせることや、社会性を高めるために、専門学科の特性を活かした実践などに取り組んでもらっている。また、アクティブラーニングにも取り組んでもらっており、そうした具体的な実践についても評価している。平成27年度に京都市内に開校した清明高校においても、いかに中学校での学びを高校でチェンジして、子どもたちが社会に巣立っていくのかという実践に取り組んでおり、そうした手法も十分に活かしながら、また、専門学科の取組も踏まえながら、今こうするとは約束できないが、検討を進めていきたい。

⑩ 専門性は特に重要である。

⑪ 京丹後の市議会議員である。先日の市議会で、京都府教育委員会への意見書が採択され、提出した。内容としては、京丹後市の高校再編にあたっては地域での役割を踏まえて、地域住民の声をしっかりと聞くこと。具体的な再編の方向性を保護者や住民に丁寧に説明すること。日程を優先させずに市との連携を十分に図ること、の3点である。市民の代表である議会の決議として提出したところだが、意見書を受けて今後の進め方についてどのように考えているのか。

◆ ご紹介のあった京丹後市議会の意見書については、小規模化による課題をできるだけ解消するなどの内容を含めたものであったと承知している。先ほどから述べている

とおりに、この地域で5回の公聴会を開催し、保護者・地域の方からのご意見を伺っているところである。この会場が3回目で、来週も開催することとしている。また、その後、公聴会を踏まえて4回目の在り方懇話会も開催し、そこでは、今までは実例であったが、計画案を示してご意見をいただき、その後、方向性を固めた段階でパブリックコメントとしてご意見をいただきたいと思いますと考えている。時期ありきではなく、公聴会・懇話会・パブリックコメントと順次段階を踏んで進めていくこととしている。

- ⑫ 会場を見渡すと中学生を持つ保護者の方が誰もみえてない。話を聞いていて、率直に、拙速に過ぎるのではないかと思う。京丹後市では、近年、行政側は学校整備としているが、私たちから言えば学校統廃合が進行した。しかし、その過程では、2年なり3年の期間があり、住民説明会もそれなりに十分開催して今日に至っている。学校整備の結果は早急には出ないと思うが、大きく言えば京丹後市を活性化する人材を生むといった方向はまだ見えてないと思う。

私の地区には約600世帯あるが、高校3年生は15人程度で、私の地区には1人もいない。高校1・2年生の保護者に、「高校入試制度はどうなっているのか。前期・中期とは何か」と聞いてもよくわからないと言う。そうした方がもっとも今回の提案の内容を理解し、自分の子どもの将来をしっかりと考える議論を踏まえて方向が決まっていくべきだと思うが、そういう現状にはほど遠いのではないか。

今春、峰山高校が、峰山高校と弥栄分校の卒業生の進路指導の詳細を一般新聞に全戸折り込みされた。それを見て驚いたのだが、京丹後市の所得水準は京都府民の6割程度と言われているが、4年制、2年制の大学、専門学校を含めて、実に9割の卒業生が進学している。全国的にみれば普通かもしれないが、この地域から仮に京都市内に子どもを行かせると少なくとも10万円程度は仕送りをしなければならない。丹後地域の保護者は、水準が低い中で子どものためには頑張っているのだと感心した。丹後地域の保護者や京丹後市の子どもの将来をきちんとさせたいという思いに応える高校制度の変更としてしっかりと位置づけてほしい。

私たちの頃は、良くも悪くも高校三原則のもとで、長期間、保護者が子どもの将来を考える基盤が続いていた。安定した中で進路指導を考えていた。私の子は3人とも京都市内にいる。孫が保育園の頃に帰ってきた際、保育園で話している内容を聞くと、「小学校に行ったら放課後に子どもが預けられる教室で勉強をして、家に帰ったら家庭学習もしないと嵯峨野のこすもす科には入れないんやで。」ということだった。保育園の段階でそういう話をしているのかとびっくり返った。高校や中学校において、本当の意味での学力をきちんとつけてもらいたい。

丹後地域の不登校率について、昨年の市議会で教育長が答弁されたが、その数字を聞いて驚いた。そうした中で、弥栄分校のようにきちんと指導している学校もあるということを知って安心した。

結論としては、2月、3月、6月に懇話会を開催し、9月頃に方向を出すということだが、もっと保護者の声を聞ける場が必要。公聴会を5カ所で開催しても、残念ながらそういう場所にならない。行政としての計画やもちろん財政の問題もあるだろうが、拙速にならないようにお願いしたい。

- ◆ 拙速という言葉は、拙いと速いという言葉からなるが、必ずしも速いと拙くなるのかという点には少し疑問がある。地域のかかなり高い密度で小学校は設置されていたので、地域の方一人一人に京丹後市では説明されるぐらいの密度で取り組まれたと思う。高校はかなり広い地域なので、若干密度の違う方法になっているかもしれないが、なるべくしっかりと議論をしていくようにとは重々肝に銘じていたいと思っている。

丹後地域の保護者の教育に対する熱心さということも、とても良い話であった。参考にさせてもらいたい。京都市域など南部地域と丹後地域の違いは、広い地域に高校が点在しているので、普通科と専門学科を併置している学校がいくつかあるということである。また、通学区域についても、高校三原則ではないが、地域の枠とがあり、100%完全にフリーということでもない。地域の子どものたちの行く学校として、通学の便も考慮して普通科についてはそうした形としている。通学区域については、通学圏とは別に旧来の学区がまだ残っている。今後はしっかりと存在意義を考えていかな



ければならないと思っており、そういう中で、今後の新しい高校の姿を十分に検討して進めていきたいと考えている。

- ⑬ シート39に学舎制にする場合の対象例があがっているが、この中で、京丹後市であれば網野高校と久美浜高校が枠の中にあって、峰山高校がその下にある。網野高校と久美浜高校が学舎になって、どちらが中心かはまだ決まっていないと思うが、峰山高校は単独として残るという例と理解して良いのか。

例えば、中学生の子どもをお持ちの保護者の方への説明、また、学舎制では生徒や教員がかなり移動して忙しくなると思うのだが、そうした点についての個々への説明は考えているのか。

- ◆ 網野高校と久美浜高校を学舎制とし、峰山高校を本校として残すという案である。  
公聴会を開催するにあたっては、与謝地域・丹後地域の小・中学校の保護者の方全員に学校を通じてチラシを配付させていただいている。これから高校進学を目指されている子どものおられる保護者の方や、場合によっては子どもたちにも来てもらいたいと思っただけのことである。来週も丹後地域の峰山・久美浜で開催するので、多くの保護者の方に来ていただければと思っている。第一義的にはそのように考えており、保護者説明会を開催することは考えていない。第4回の懇話会開催後、保護者の方のご意見がいただけるよう計画案を示したいと考えているところである。

【平成28年7月31日(日) 10時30分～12時00分 [於：京丹後市峰山総合福祉センター]】

① シート17「学校の小規模化により想定される主な課題」に、「生徒数が減少して集団行動の場が確保できず人間関係が固定化しやすい」「学校行事や生徒会活動の活力が乏しくなり行事の精選が必要になる」とある。私が勤務する弥栄分校は全校生徒74人だが、その実感は全くない。弥栄分校では学校行事も活発に行っており、2・3年生は39人しかいないが、生徒会活動や家庭、農業クラブで20人以上の生徒が役員をして、様々な行事を行っている。「活力が乏しくなり」と断定されていることを非常に腹立たしく思うし、違和感を感じる。他の項目については「可能性がある」「できないこともある」とあるのに、なぜその部分だけ断定的に書いてあるのか。どこの小規模校に調査をしたのか。どこの学校を指して言っているのか。

◆ 弥栄分校の活動については評価をしているし、他の分校についても同様である。ただ、我々が考えているのは、一定規模の生徒がいる学校における生徒会活動や子どもたちの主体的な活動のことであり、生徒数が減少していくことにより活力が低下していく可能性があると考えているところである。現在ある小規模校の頑張りを過小評価するようなことは考えていない。全体として生徒が減少していく中で活力が低迷しないような形を考えていきたいというスタンスである。

② 20数年前、峰山高校の本校に勤務していた時に生徒会担当をしたことがあるが、その当時、全校生徒が1300名ほどいて確かに頑張っていたが、なかなか生徒会に立候補してくれないといったこともあった。人数が多ければ活発になるというわけではないと思う。なぜ人数だけで生徒会活動の活力が乏しくなると断定されるのかが分からない。どこの学校を調査した、となぜ言わないのか。府教委で「人数が少なくなったらこうなるに違いない」と勝手に想定しているだけか。

◆ 具体的な調査はしていない。一般論として考えているところである。

③ この想定自体が間違いではないのか。私たちは生徒会が活発に活動していると主張している。生徒会活動が衰退している具体例を挙げてもらわないと。弥栄分校を見に来てほしい。小規模校だから衰退するなどということはない。生徒が減ったら活力が乏しくなるなどと断定されると腹立たしい。その点を再度答えてほしい。

◆ 小規模な学校で生徒たちが頑張っていることについては評価している。ただ、例えば、中規模、大規模校の生徒会活動や部活動において、地域のボランティア等様々な形で展開している取組が、子どもが減っていくことによって低迷していく可能性があるということを想定して考えていかなければならないということである。

④ 大規模校では今の生徒会活動はどうなっているのかということも調査していないのか。大規模校の調査もせず、小規模校の調査もせず、少なくなったらこうなるだろうという予想に基づく想定だということか。弥栄分校を評価していると言いながら、なぜ統廃合して弥栄分校をなくして、フレックス化するのか理解できない。なぜ評価しているのになくそうとするのか。

◆ 弥栄分校では、今年度柔軟な教育システムの実践研究に取り組んでいただいております。多様な生徒を受け入れながら教育活動を行う中で、発言されたような状況にあると考えています。丹後地域の他の分校でも多様な学びが行われている。弥栄分校では農業・家政を切り口としながら教育活動を行っており、その環境を活かし、継続した形で、他の分校で学ぶ生徒も含め、フレックス学園構想に基づく学びを考えているところである。弥栄分校での取組を継承、発展させたいという思いで、新しい在り方を考えているところである。

⑤ 前提としての1学級40人は譲れないのか。これが学級数など全ての統計の基になっている。地域によって柔軟性を持たせ、30人、20人の学級にすることはできないのか。教育力や教育の質の向上と言う場合、必ず少人数学級といった言葉が出る。専門学科と同様に、普通科でも地域に応じた柔軟な学級規模にして、地域に合った高校を維持してもらえないのか。

◆ シート15にあるように、平成39年度選抜では網野で80人規模、久美浜で50人規模、加悦谷で60人規模になると見込まれる中、40人単位にこだわれない状況があることは認識している。専門学科では30人規模の学級があるが、基本的には40という国の制度上の縛りがあり、それをベースに様々なことが決められている。教員定数は基本的に学級数ではなく募集定員で設定される。60人で募集をしてどのような学級編制にするかについてはいろいろとパターンがあると思うが、40人単位で積み上げた数字を基礎として、様々な制度が構築されている。

⑥ 本日で3回目の公聴会の参加となるが愕然とする。この間の回答にはほとんど具体的な中身がない。地元の方にとって切実なことなのに、質問に対して「検討します」「研究します」ばかりである。あるいは先ほどのようにきちんと答えがもらえないケースもある。中身はこれからそれぞれの学校の先生方に決めてもらうということだが、「学校数は減らすが、丹後地域では通学の問題も考えて学舎制で残す。決めつけはしたくないが、まず再編ありきで中身はぼちぼち決めましょう。」というように見える。そのようなことで住民の方が子どもの将来を託せるのだろうか。3回参加して、学校の枠以外はほとんど何も決まってないことが分かった。これで9月に計画を策定するのかと言いたい。府立高校の中にはかなり力を入れている学校もあるが、丹後地域の高校については非常にぞんざいなやり方である。何も決まっていないが住民に計画案を示し、これで意見を聞いたとするのか。十数年間、高校改革の問題に関わっているが、現地やパブリックコメントで出た様々な意見を教育委員会が一つでも取り入れたことがあるのか。何一つ覚えがない。公聴会をするのは結構だが、せめて「こういう予算をつけて、こういう計画で進めていきたい。」としっかりとってもらわないと地元の方は不信感を抱くのではないのか。

学舎制について、京都八幡高校にも岡山県の真庭高校の知人に詳しく話を聞いた。説明ではメリットをいろいろと挙げられたが、京都八幡高校の教員に言わせれば、「はっきり言って本校・分校の関係である。」ということだった。分校は維持が大変であるとのことだった。真庭高校は、普通科と農業に関する学科が中心で、「落合校地と久世校地は別の学校である。一くくりになっているだけ。連携や交流と言うがいかにかそれが難しいか。別々の学校とほとんど変わらない。」とのことだった。網野高校と久美浜高校を学舎制にして、2つの伝統ある高校がしっかりと地域に根ざし、地域や町づくりにプラスになれるのか。学舎制ははっきり言えば「統合」だと思う。しかも20km離れているところはあまりない。毎日の部活動はどのように移動するのかと考えると、学舎制は現実味がなく、イメージがわきにくい。本当に網野高校と久美浜高校の振興につながるのか。

また、久美浜高校には地元の子は3割程度しか行っていないと聞いた。総合学科の是非については意見があると思うが、総合学科になったことで、普通科に行くためには網野高校か峰山高校まで通わなくてはならないというデメリットが生じているのではないのか。地元の子が安心して行けるように戻すべきではないのか。

◆ 決まっていないことが多いというのはある意味そのとおりで、この再編はこれから何年かかる仕事だと思っている。地元の方々、教職員、保護者の方の意見を聞きながら、学校の在り方を探っている。一定の目途として大枠をこの夏に提示し、さらに意見を伺っていきたいと考えている。各学校の学びに必要な教育資源については年々予算をしっかりと確保して積み上げていくことになる。すでに平成32年頃のスタートと説明したが、まだ4年先である。ただ、現在の中学生に、丹後地域の教育が大筋としてどのような方向になっていくかを知ってもらった上で志願してもらうことを前提としている。そのためにおおよその姿を提示しているところである。

久美浜高校については、どのような学科であれ、地域の子どもの数が減り、50人程度の募集定員になるため、どう充実させていくかを考えることが基本である。そのため高校の在り方として学舎制を検討してきた。20kmの距離があるので毎日一緒に部活動をするにはできないかもしれない。交流するためのバスの確保は必須だと思っている。時には合同で練習し、時にはそれぞれの学舎で練習することにより、今後も維持できる体制を築いていけないかと考えているところである。

⑦ 意見を歪めないでほしい。「決まっていることが何もない」とは言っていない。公聴会をする時点から既に決まっているということでは具合が悪い。問題は具体的な中身が何もないということである。バスをどのように確保していくのか。そうした中身もほとんど聞けなかった。決まっていることが何もないのではなく、提示される中身に具体性がなく、この状況でもう方向性を決めるのかと言っている。

◆ バスは必ず確保すると答えるべきところだが、予算は府議会で議決していただくものである。教育委員会としては必要だと思っており、このような提案をする以上は確保することを基本に進めて行くということである。ただし、予算は議会の理解を得て議決された段階で「決まった」と言えるものであるということである。

⑧ すごく熱心に考えてもらっていると心を熱くして意見を聞かせてもらっていた。一点、特別支援の観点から発言したい。文部科学省のホームページを見ていると、高校でも平成30年を目途に通級指導教室を設置するとのことである。通級も大切だが、小・中学校には特別支援学級があるので、その継続として高校にも特別支援学級を設置してもらえると子どもの選択が広がっていくのではないかと思う。清明高校の話も出ていたが、学校を別にするのではなく、インクルーシブ教育ではないが、「みんな一緒に」ということを望んでいるし、子どもも望んでいるので、その点も踏まえて考えてもらいたいと思っている。

◆ 通級指導教室については国において一定の計画が出されている。今のご意見は参考にさせていただきたいと思うが、高校の場合は入試があり、それを経てそれぞれの生徒が高校に入学していく。その枠組みの中で、子どもの特性に応じて自立活動支援が必要な部分について、例えば放課後にそのための時間を設けるなどいろいろなパターンがあるが、これについては現在、我々も検討しているところである。

⑨ 確かに、入試で決まっていくとは思いますが、国においても多様な子どもに対して多様な教育を提供していくという方針であり、少し方向性も変わってきているように感じる。それがAO入試などの様々な入試制度に反映しているのだと思う。言われていることはその通りだが、入学した後に選択できる幅があることが大切だと思うのだが違うのだろうか。

◆ 我が国は障害者の権利条約を批准し、「インクルーシブ教育システムの構築」に取り組むこととしている。その取組を実効あるものとするために、障害者差別解消法が制定され、本府においても1年前に条例を制定したところである。基礎的な条件の整備や合理的配慮を行う必要がある。例えば、高校入試が合理的配慮に欠けるものであってはいけないと思っている。発達障害のある子どもが、例えば文字を読みにくい、書きにくいという場合には、センター入試でも配慮されている。高校入試でも、今後様々な工夫をしていかなければならないと思っている。

特別支援学校には小・中学部、高等部があり、小・中学校には特別支援学級、通級、通常の学級があるが、高校にこのような多様な学びのシステムをどう導入していくかは今後のテーマであり、いかに早く実現していくかが府教委として取り組まなければならない課題だと思っている。ただし、高校教育は単位認定制である。義務教育とシステムが違う分だけ、様々な難しい問題があるので、十分にこれから研究・検討しなければならないと思う。丹後地域の高校の在り方を考える上でもそうした考え方を踏まえて検討すべきだと考えている。

- ⑩ 孫のためにこの丹後地域がどうなるのかと心配に思い、初めて参加した。  
まず、この素案は非常に粗い。地元のことを考えていない粗い資料だという思いが強い。加悦谷高校と宮津高校、網野高校と久美浜高校でキャンパス化とあるが、宮津高校と加悦谷高校であれば、宮津高校が本校だという思いが子どもたちに生まれると思う。加悦谷高校の子は分校を卒業したという思いになると思う。加悦谷高校には加悦谷高校の伝統がある。宮津高校とは全く違う。それでも、中3生の減少は現実なので、そこはしっかりと府教委としても皆さまの思いを受けて考えていくべきだろう。現実には現実である。しかし、9月に計画を策定し、それから府議会を通すということだが、このような粗っぽいものが通ってしまうと、この丹後地域は潰れてしまう。府教委が教育で丹後地域を潰してしまうことにもなりかねない。府教委の考え方のせいで、福知山の女子高が潰れたという現実がある。9月に策定し、すぐに府議会に通していくつもりなのか。
- ◆ 高校制度を支える様々な制度がある。例えば学校の設置は府の条例なので議会で決定するものである。学科や課程は教育委員会の規則で決めている。こうしたことを具体的に決めるのは、平成32年度がスタートとすればその前年か半年前頃になる。大きな考え方の方向性を持って具体の教育課程の微細まで詰めていくという仕事がこれから3年、4年と続いた中で、積み上がって形になっていくので、その上で、最終的に教育委員会、あるいは府議会にお諮りして決めていただくという流れになる。すべてがこの夏に決まるということではない。
- ⑪ そのことはわかった。丹後地域の議員の方々にもしっかりと考えてもらいたい。  
学科についてだが、普通科がとても多いように思う。私は福知山だが、専門学科を卒業後、工業団地に勤務している。専門学科が地域を支えているということも一つの現実である。かつての高度成長期であれば、普通科を卒業して大学に行くことはすばらしいことだったが、今はどこの大学でも入れるようになり、あまり期待をしていない。丹後地域において、もっと地元に残ってもらえるような専門学科を考えるべきではないか。京都府の教育に係る南北の格差はあまりにも大きすぎ、教育だけの改革ではとても追いつかない。府は南北の格差の是正をもっとしっかりと考えていくべきだと思うので、よろしく願います。
- ◆ 将来の職業選択に向けて、中学校段階で将来を見据えた学科選択をすることがなかなか難しいという一方で、地元に残るという強い意志を持って職業選択を行うために専門学科も必要であるというご意見だと思う。今のご意見も踏まえて、今後、学科の在り方についても検討させてもらいたい。  
南北格差ということだが、それぞれ地域の状況が異なるということ踏まえて丹後地域においてこうした公聴会を開催しているところである。それぞれの地域の状況を踏まえながら、学校の在り方について十分検討を進めてきたいと考えている。
- ⑫ 一市民だが、まだよく分からないというのが全体的な感想である。この地域に住んでいる住民としてもっともっと理解しないと、子どもたちが受けていく教育に対して責任を持って意見を言いにくい。分からないことが多いので、ぜひ丁寧に事を進めてほしい。よく理解した上で主体的に参加していきたい。公教育なのでとりわけそのように進めてもらいたい。  
分校を統合する件について、フレックス学園構想がよく分からないので具体的にイメージしにくいのだが、例えば、伊根分校に通っていた生徒が弥栄分校の生徒になることになれば、具体的に通学はどうなるのか。どういう教育を受けられるのかといったことがほとんど分からない。宮津高校に分校があったことにはそれなりに大きな理由があった。海を渡って宮津の本校に行くことが無理なので伊根に分校ができたのだと思う。そうした生活の問題がどうなるのか分からない。一人の高校生、青年期の一人の人間の生活がどうなるのかという視点で考えてほしい。通学配慮のバスを出す、出さないということだけでなく、1日の生活がどうなるのか。通うだけで1日が目一杯になるような生活で良いのかどうか。青年期において、部活動など学習以外のこと

への時間の使い方など、どういう生活であるべきなのか、一人の具体的な人間を通して縦に考える視点も必要ではないか。教育課程をどのように組むかということだけではなく、高校生の時期に人格を育てる教育をするには、どういう1日が必要なのか。それを保障するために学校はどうあるべきなのか。どういう保障が必要なのか。青年期の特徴を踏まえ、一人の高校生にどう1日、時間が必要なのか。どういう集団が必要なのかなども含め、人を育てるという視点から1日の生活をどう組めるのか。ぜひそのあたりを検討の視点に入れてもらいたい。

拙速に事を進めず、私たちが充分によく分かってものを言えるように、丁寧に時間をかけて進めてもらいたいと思う。

◆ もちろん、学校教育においては、教育課程に基づいた学習の内容は、そうしたことを基にして子どもたちの将来あるいは希望をつくっていくものなので、今のご意見を反映できるようにしたい。ただ、子どもたちの生活サイクルは通学や時間と大きく関わる。通学や時間の問題は、子どもたちの個々の生活や地域の生活も踏まえて考えていきたい。

◆ 伊根分校ができた経緯は、ご意見のとおり、伊根町に住む子どもたちが遠方のため宮津高校まで通いにくかったということと、働きながら学ぶ生徒が通っていたことである。分校で学ぶ生徒の状況は変化しており、また、現状では、伊根分校に伊根町から通う生徒は全校生徒のうち2名で、遠くの地域から通っている生徒が多いという状況である。そうしたことを踏まえながら方向性を示している。

⑬ 私も今の提案は性急すぎで、もっと十分に論議してから進めてもらいたいと思っている。理由の一つは、京丹後市では、保育所も小学校も中学校も統廃合され、本当に地域がさびれているからである。家の近くの学校も統廃合されて中学生がいなくなった。バス通学なので地域で顔を見かけて「こんにちは」「おかえり」などと声かけすることが全くできない。部活動をしたいと保護者が要求して統廃合されたのだと思うが、バス通学なので部活動をする時間も減り、本当に大変だと思う。過疎化に拍車がかかり、私たちの地域はさびれてきている。この上、高校が統廃合されてしまったら一体どうなるのか。

2つ目は、先ほどから何度も出ているが通学が大変である。遠距離のため生徒の負担はもちろんだが、保護者の負担も計り知れない。私の子どもが高校生だった時には、バス代が1学期間で10万円近くかかり、下宿させる人もいたほどで、大学に行かせているのかと思うほどお金がかかった。保護者の経済的負担がすごく気になる。伊根分校が弥栄にくることになれば、病気にでもなっても迎えに行く時はどうするのか。私たちが同じ税金を払っているのにあまりにも不公平だと思う。統廃合が良いのか、よく考えてもらいたい。

3つ目は、1クラスの人数を減らせば良いと私も思う。子どもが減ったからといって統廃合するのではなく、少人数の中でどの子もわかる授業をしてもらいたいと切に思う。若者に夢が持てるような正規の仕事を増やし、京丹後市や宮津市に住んで良かったと言える、そういう若者をつくるために頑張ってもらいたい。

⑭ 分校の統廃合は、京都フレックス学園構想に基づかねばならないのか。フレックス学園構想についてよく読むと、普通科ながら実習体験型科目を多く設定すると書いてある。今、弥栄分校には農園芸科と家政科があり、そこで人間教育をしている。それがフレックス学園構想によって普通科にされるということであれば、今の教育は継承できないのではないかなと思う。農園芸科の先生に聞くと、「農業は積み上げがすごく大事で、各学年で学んだことの積み上げが必要なのに、フレックスになってしまうと1年生で学んだ子もいれば学んでない子もいるという状況になるのではないかな」とのことだった。実際、久美浜高校の総合学科でそういう実態があったので、今はそうならないのではないかなとこのことだったが、(弥栄分校も)そうなるのではないかな。普通科の中でつまみ食いのように農業や家政を勉強することは可能かもしれないが弊害もある。もし可能であれば、農園芸科と家政科を残し、

普通科を増設する形で、京都フレックス学園構想に基づかない、新たな弥栄スペシャルという形で考えてもらえたらありがたいと思っている。

先ほど特別支援の話が出ていたが、先日、保健所が招集した学校の特別支援コーディネーターとの交流会があった。伊根分校、間人分校、弥栄分校、与謝の海支援学校の進路担当や保健の担当、コーディネーターが集まって話をした。それぞれ様々な子どもを抱えているが、1校に集められるのが本当に良いことなのかどうか分からない。清明高校はまだ2年目で、卒業生が出ていないので評価ができないが、入試だけみると1年目は2倍を超え、定員120人に対し120人以上が落とされた。行きたかった子が行けなかったという学校になっている。2年目の今年も2倍には至らなかったが、100人以上が落とされた。本当に行きたい学校なのにに行けないということが良いのかどうか。弥栄分校が一つの学校になり、選抜をして、行きたい子を落とすのか。伊根分校と間人分校と弥栄分校は、現在全入状態で希望すればほとんど入れる状態になっている。それが良いのかどうかという評価はあると思うが、「来たい」という気持ちを持っている子はぜひ受け入れて、高校で育てていきたいと思っているので、そうしたことも考えてもらいたい。

- ◆ 農園芸科・家政科で築いてきた教育は素晴らしいと思っている。普通科の座学だけでは学びにくいのが、植物を育てたり、家政の勉強をする中で自信を取り戻し、それを職業につなげていくなど力をつける教育が行われている。今のご意見は今後しっかりと検討していくべきものだと思っている。

清明高校は、倍率が1年目非常に高く、今年度も高かったが、これまで不登校でなかなか高校に行きづらく、夜間定時制や通信制に進学していた子たち、あるいは高校を諦めていた子たちが学ぶ場として大変注目を浴び、期待が大きく、多くの方が受検された。丹後地域においては、京都市あるいは山城地域のような大きな人口の中でつくった学校とは全然環境が異なる。清明高校自体の評価だが、中学校時代になかなか学校に来れなかった子が、清明高校に入って元気に通っているという多くの事例がある。丹後地域の分校でもそうした教育が行われている。中学校の時に学校に行きづらかった子が、弥栄分校も含め、元気に学校に行けるようになっている。そうしたことは、学校をつくる上で、目標というか達成しなければならないポイントだと思う。

フレックス学園はシステムがフレックスである。清明高校は昼間2部制だが、清明高校のような形を他校でも行うのが良いのかどうか、今後考えていく。柔軟なシステムということでフレックス学園構想の精神を取り入れたものである。

【平成28年7月31日(日) 15時30分～16時45分 [於：京丹後市久美浜農業センター]】

- ① 学舎制になっても、網野高校の企画経営科や久美浜高校の総合学科の入試は今までと同じと考えて良いのか。
  - ◆ 学校の在り方や教育内容について検討しているが、その在り方を踏まえながら入試制度も考える。基本的には前期・中期・後期という枠組みは踏襲する中で、学校それぞれの在り方を踏まえながら、それぞれの選抜方法を決定していく。
- ② 観光や食、パティシエといった話があったが、丹後地域の子どもたちの中にパティシエになりたい生徒が何人いるか。農業に就きたい生徒がどれくらいいるかというところ、それほどいないと思う。普通科で勉強して大学へ進学する子どもたちが多い中、特殊な学校を置いて子どものニーズに合うのかどうか。
  - 三つの分校が一つになることについて、伊根分校、間人分校に通っていた生徒が弥栄分校に通うとなると、とても遠方から通う生徒が出てくる。宇治市の城南高校が統合した場合とは違い、交通の便が悪いし、便が多い時間帯でも子どもが多く乗車するなど大変である。地域によって違いがあることをどのように考えているのか。
  - ◆ お示しした教育内容は例であり、内容は学校と詰めて考えていく。分校については、現状では地元地域の生徒が通っていない状況にある。そうした背景を踏まえつつ、学校を一定集約した中で、生徒の状況に合った学びを提供していきたい。
- ③ 部活動後に帰宅する際の電車の便がなく、帰宅時間は21時を過ぎる。2校間の移動についてはバスを考えているとのことだが、部活動後の便も考えてもらえるのか。
  - ◆ 前提として、部活動も含めた教育内容の計画や内容の充実に関して一定の方向性をお示ししており、実際の条件整備については今後検討していくことになる。現時点で予算措置されていない中でははっきり言えないが、いただいたご意見については今後検討する要件だと考えている。
- ④ 学校規模が問題なのか、学級規模が問題なのか。多くの生徒がいる大きな学校が良いのか、生徒が少ないけれど学級が多い方が良いのか。
  - ◆ 一定の生徒規模が必要だと考えている。その中で、教育活動を充実・活性化していくということを前提として示している。
- ⑤ 適正規模は誰が決めたのか。根拠はあるのか。
  - ◆ 京都府としては、平成16、17年度に出した府立高校改革推進計画において一定の適正規模を示しているが、地域の状況を踏まえながら計画していきたいと考えている。1学級40人をベースとしつつ、生徒数が減少する中では維持が困難であるが、ある程度柔軟な考え方で一定の学級数を維持し、教育活動を継続していくことを前提として計画を進めていく。地域の実情を踏まえつつ適正規模を考えていきたい。
- ⑥ 久美浜高校と網野高校がキャンパス化になることで、部活動が割り振られそれぞれの校舎での活動となる場合、部活動を考えてその校舎に行かなければならないとなると、生徒の負担になると思う。
  - ◆ 適正規模であるが、高校になると様々な進路に応じた、例えば理科や社会、数学などの教科の中の科目など多様な講座を開講したり、職業教育系の教育課程などを多様に展開するためには、一定の規模があることが望ましいと考えている。
    - 部活動にしても、野球部、サッカー部、ラグビー部、バレーボール部、バスケットボール部を置き、さらに男女別に置くとすると、相当の規模が必要となる。8学級規



模であれば大体展開でき、6学級でも何とかなるが、4、3、2学級となってくるとかなり苦しくなる。久美浜高校では、現在は（1学年）80人程度の生徒が学んでいるが、今後1学年50人、あるいはそれを切っていくかもしれないという状況にある。その中であっても、多様な学びの機会をどう確保するかということで、学舎制を一つの方策としている。ただしすべての課題は解決しない。皆さんもお感じになっていると思うが、小さな学校となった場合のデメリットを何とか少なくしようということが学舎制の考え方である。消極的な意味ではなく、1+1を3にと説明したが、横串のコンセプトを立てて、新しいものを創造するというで考えていきたいと思っている。例えば、久美浜高校ではカヌー部の活動が非常に盛んである。中学校でも行っている。網野高校のレスリング部や野球部なども活躍している。ただ、今後学校規模が小さくなると、単独でチームを組めなくなっていくことになる。レスリングなどは個人競技のため、小さくても何とかできるが、野球などは難しくなる。その時に、久美浜高校と網野高校では20km離れているので、バスを確保し、行き来の手段にする。また、自宅の場所によって降車する場所などについても細かく詰めて、部活動と一緒にできることを追求したい。

それから学びの内容についてだが、久美浜高校の総合学科の教養系列で学び、大学に進学している子もいるし、難関私学に合格している子もいる。そうした学びの場や、これだけ田園が美しく広がる久美浜の地で農業教育を今後どうするのかということも考えていかなければならない。また、丹後地域における観光は、産業の柱となっていくため、そこに人材をどう供給していくかということも、地域づくりや丹後地域の未来づくりにとって必要なことだと思っている。高校は丹後地域における最高の学府であるので、どう活性化していくかということで、先ほどからの質問にまとめて答えさせてもらった。

- ⑦ 部活動にはバスを用意してということであったが、久美浜町は山の中から海の近くまでとても広い。もともと熊野郡として一つであり、高龍中学校、久美浜中学校があつて、小学校ももっと多かつたが、統廃合によって今は1校になった。この地域の子どもたちが、高校に行く、部活動をするというときに、おそらく思われているようにはいかないだろうと思う。例えば、久美浜高校に通っているのであれば、ある程度可能だと思うが、網野高校で活動するとなると、随分違ってくると思うし、網野高校からも2経路ぐらい必要になる。本当に網野高校でレスリングをしたいという子どもにとってはそれで良いと思うが、そうでなく本当は久美浜高校で勉強や部活動をしたいという子にとっては負担になるし、保護者の負担ももちろんあると思う。どの方法が良いかと言われるとこれというのはないが、田舎の子どもたちが我慢しなければならないとか、保護者に負担をかけなくてはいけないということのないようにしてもらいたいと思う。

久美浜高校では、カヌー部が全国大会に出場するなどして頑張っている。例えば、人数が少なくなってきた場合に何人入部するかということもあるが、今まで頑張ってきた部分も継続できるようにしてもらえればと思う。

また、先ほどから観光の話が出ているが、久美浜の子どもたちに観光といっても、おそらく多くの子どもたちはそのようなことを考えていないと思う。大学進学や専門学校などを考えている子どもが多いので、観光について勉強するというのはどうかと思う。本当は普通科で勉強したいが、人数的に観光の学科などに行かなくてはならないということも出てくると思う。久美浜高校では福祉に長らく取り組まれているが、説明では宮津の方で医療や福祉といった教育をすることであった。福祉も以前は免許が取れたが、今は取れなくなっているため、どこまで福祉に魅力があるのかという思いもある。そうした点についてはどのように考えているのか。

- ◆ ここで生まれ育った子が、久美浜高校で野球がしたいと言ってチームが組めるのなら是非取り組んでほしいと思う。しかし、将来的に、もし久美浜高校だけで野球のチームが組めなくなった特に、「野球は無理だね。」ということではなく、他の学舎と一緒にチームが組める可能性を追求していくべきだと思っている。それが子どもたちに多様な教育の場、子どもたちのしたいことを保障していく考え方だと思う。カヌー

については伝統を引き継いできているので、久美浜の子にはどんどんカヌーをしてほしいと思う。

また、観光については、網野高校に商業系の学科があるので、むしろそちらでの学びが観光には近いかもしれない。久美浜高校の福祉系列の生徒は頑張っている。この春も10人程度福祉系の職場に巣立っている。今後も福祉を継続するかどうかは、しっかりと考えていかなければならないと思うが、総合学科として多様な学びを築いてきたので、これをどう未来につなげていくかを十分に考えていかなければならない。

- ◆ 部活動についてだが、バレーボールなどで規定の人数が揃わない場合には合同チームを組んだりすることがある。ただし、この場合はどちらの高校も人数が少ないというマイナスの要因により、合同にするというケースである。その場合、相方を探すのが非常に難しい。探しても随分遠い距離になるということが往々にしてある。学舎制ということであれば、合同チームとは違い、基本的には身内の学校、あるいは近いエリアでチームが成立できる可能性が高いというメリットもある。
- ⑧ シート15に生徒受入率79.4%とある。公立高校の意義は、経済的負担が少なく勉強できることだと思う。高校だから勉強についていけないとダメだということはあるが、79.4%という率をどのように算出したのか教えてほしい。同じ高校生でも私立に行くと経済的負担がとても高くなる。勉強についていける子ならば、受入率を配慮して80%、90%にできないのか。勉強についていける子は入学を認めてもらえれば、現状の生徒減の見込み数も当然変わってくる。その点の考えはどうか。
- ◆ 79.4%とはこの地域の中学校を卒業して地域の公立高校に入学する生徒の受入率である。この地域は約8割で、他地域の6～7割に比べると高い率としている。それ以外は、地元の京都暁星高校や中丹地域の私学、あるいは他府県などに進学している。経済的なことについては、府内の私立高校に入学された場合には、府の「あんしん修学支援制度」において、所得に応じて授業料を支援している。そうした制度も活用しながら私学にも進学されている状況である。受入率が低いのではないかというご質問だと思うが、他地域に比べると非常に高く、この地域の状況を踏まえた上で79.4%としたところである。
- ⑨ 根本的な質問だが、なぜ網野高校と久美浜高校が学舎制になるのか。行き来を考えると、距離が近い方がよりリスクが低いと思う。峰山高校と網野高校の方がより距離が近いと思う。なぜ網野高校と久美浜高校なのか。
- ◆ いくつか理由がある。峰山高校には弥栄分校があり、分校についてはこれから充実を図っていきたいと考えている。また、工業系の専門学科も設置している。子どもたち目線ではなく申し訳ないが、キャンパス3つという形になると、かなり学校運営が難しくなってくる。そのため、久美浜高校と網野高校の組合せにしたということが一つの理由である。少し大きな規模を確保しようと思えば、3校で一つということも考えられるが、そうした場合も運営が大変になる。久美浜高校を廃校にしてしまうと、地域で学びたい子どもたちにとっては大変なことであるし、学舎として農業教育の伝統もしっかりと踏まえていかなければならないと考えている。網野高校と久美浜高校は、峰山高校よりも少し規模が小さいので、学舎によって一つになることによる規模のメリットがあるため、距離は20kmと少し遠いが、総合的に考えてこの2校の組合せを考えたところである。
- ⑩ 地元校の教員である。キャンパス化で可能性が広がるとのことだが、可能性として考えることと、実際に可能なことは違うのではないかと思う。例えば、生徒が行き来して授業を受けることは、現実的に久美浜高校と網野高校では考えられないと思う。また、ICTを活用した同時双方向性の授業も、年に何回か特別授業としてはできるかもしれないが、その手法で通常授業を展開すべきではないと思う。教員の行き来にしても、例えば、地理はA学舎、化学はB学舎とあるが、学級担任などの業務に支障

は出ないのか。通学については、現在でも保護者の送迎が多い。2時間に1本しかバスがないので、2時間待たせることを思えばと無理にでも送迎されている状況があり、今以上に送迎に保護者の負担がかかることは問題だと思う。

具体的に何があつたらどこにできるということが示されない中で判断はできないと思うが、想定として平成41年度の現在生まれている子どもの数を元に推計値が示されているが、今回の再編は、少なくともそこまでを見通した再編ということになるのか。キャンパス化は本校、分校と違い、特に文部科学省で規定されていないので、この先、さらに生徒が減った場合、一つの高校の1校舎を閉めて使わなくなるという判断で、今回のような検討の機会もないまま、簡単にキャンパスをなくしてしまうというような危険性はないのか。

- ◆ 基本的に、授業に関しては生徒が移動するという事は極力さげたいと思う。生徒が移動するのは、例えば、両キャンパスが合同で実施する授業や行事、夏休みの補習などであるが、日常的には教員が移動することを想定している。

また、ICTの活用だが、これもかなり技術的には発展しているので、例えば、A校で授業をしてB校で観るなど、できるだけ移動しなくても済む形も模索していきたいと考えているところである。

部活動についても、基本的には自分の学ぶキャンパスでパート練習をする形になるかと思う。土・日曜日に合同で練習できる機会に生徒が一緒になって活動し、公式戦にも出て行くということを考えているところである。

- ◆ シート13の表などで平成41年まで推計を示している。現在、各市町において地方創生ということで人口をどう増やしていくか、あるいは減少をどう食い止めるかということで取り組まれている。ただし、これは非常に難しい課題である。京都府としては、ぜひこの京丹後市でも人口が増えていくようにと推し進めようとしているところである。ただ、100、200人と人口が増えても、子どもが減っていく傾向は変わらない。1学年の子どもに置き換えると非常に少ない。したがって、久美浜高校が50人程度の規模になるということも高い確率で免れないと思う。その先どうなるかということだが、できればこの規模でずっと続くように魅力ある学校づくりをし、ここでの学びの場を守っていきたいというスタンスである。